



GALLERY

ギャラリー



「大日如来」仏画
三村 岩雄さん(川端町)



「フクロウ」切り絵
福田 傳さん(高倉町田井)



「鶴寿千歳」書道
平井 常子さん(備中町平川)



「おしぼり置き・ボンボン入れ」烏城彫
前原 美智恵さん(本町)



「雪だるま」手芸
谷田 菊枝さん(有漢町上有漢)

作品の募集について

- 【文芸】短歌、俳句、川柳など
- 【作品】絵画、工芸品、まちの風景写真など
- 自作の未発表作品で、一人一作品とします。
- ギャラリーの作品については、その写真をお送りください。
(撮影が困難な場合は、ご連絡ください)
- 住所・氏名・電話番号・作品の場合はタイトルを明記のうえ、お送りください。
- ※締め切り 掲載号の前月の末日(必着)

- 問い合わせ・送り先
〒716-8501 (住所不要)
高梁市役所企画課公聴広報係 (☎②0210)
Eメール: kikaku@city.takahashi.okayama.jp
- ※応募多数の場合は、紙面に掲載できない場合もありますので、あらかじめご了承ください。
- ※提供いただいた写真等は返却できません。

文芸たかはし

(敬称略)

短歌

我が人生心を癒やす流行歌つい口ずさむああ上野駅

井上 明彦 (備中町平川)

梅が枝に月の光の流れいて今宵も惚ぶ故郷の故人

梅野 八郎 (松山)

如月も終りとなりて山々のかすむがごとく芽の萌えそめぬ

小野はる恵 (原田南町)

蠟梅の黄色はやさし幸福をそとと私に傳へてくれる

亀石恵美子 (川上町仁賀)

小屋の角一輪の花早ばやとタンポポ咲くよ異常天候

下向 近雄 (備中町平川)

冬枯れの庭に生ひ出しフキノトウ愛しきまでにうす緑して

榊上 秀雄 (備中町西山)

俳句

春立ちて旅の便りもちらりほら 妹尾 昌美 (東町)

愛娘初めの一步に浮かぶ笑み 高杉 澄香 (横町)

お笑い川柳マンガ

鈴木 繁實さん



飯事のような息子の新所帯

地名をあるく



二十九 間之町

「間之町」という地名は、現在の高梁市間之町で市立図書館や中央公園、曹洞宗安正寺などのある向町の南に位置して、城見通りを隔てた西側には荒神町、甲賀町、八幡町があります。そして「間之町」の東側一帯は榎山陽オカムラの工場が占めていてこの町の昔の面影はなくなっています。

近世、松山城下時代には「間之丁」と称されていて、家中屋敷町の一つでした。

元禄時代(一六七七〜一七〇四)初め頃の記録と言われる「水谷史」(「御家内の記」)には「間之町」の町名の記録が見えず、延享元年(一七四四)頃の「松山家中屋敷覚」(市立図書館)にも、西側の荒神丁、「一四軒内」一三軒家中屋敷、一軒給人屋敷、そして甲賀丁「二五軒内」八軒家中屋敷、八幡丁「…」などなどと書かれてはいるが「間之丁」は出ていません。この時代には「間之丁」はまだ取り立てられていなかったことが推察できるのです。また、同じ頃の正徳元年(一七一)〜延享元年(一七四四)の石川総慶時代の「松山城下絵図」(市立図書館)にも、荒神丁の道筋が東に延びる北側の向丁と南の「間之丁」側には「御先手組長屋」がその南に「芝稽古矢場」が描かれているだけで、まだ「間之丁」の屋敷町は出ていないのです。

その後、嘉永二・三年(一八四九・五〇)頃から安政初年(一八五四)頃の「昔夢一班」によると『西間之町に八軒の家中屋敷、「中間之町」に一五軒、そして「東間之町」に一二件、うち二軒は合長屋」とあり、荒神丁の道が東へ突き当たった場所に、制札場が記録されています。

江戸末期の板倉氏の時代になると「間之丁」が家中屋敷町として記録に見えていることから正確には分かりません。

せんが、板倉氏時代に城下町の一つとして取り立てられた町であることが考えられます。

また、天保一〇年(一八三九)二月二十九日「間之丁」の足軽長屋から出火、外曲輪の侍屋敷や神社、高札場、番所、長屋、寺五カ所、町家二九八軒、土蔵四〇カ所などなど城下町が広く焼失した松山城下最大の火災が起こっています。(増補版高梁市史)その後復興した頃の「幕末の絵図」(市立図書館)には、柿木丁から南の道沿いに「西間之町」、その東(現・市立図書館の南)の道の東西は「中間之町」、荒神丁の通りを東へ突き当たった場所に制札場、その前の南への道沿いに「東間之町」また「中間之町」の南側に「同心丁」が描かれています。この「同心丁」は板倉時代に同心組の長屋として取り立てられたものですが、明治になって「間之町」と合併しています。今では「間之町」には、古い家もなくなり、昔の家中屋敷町の面影はなくなりましたが、堅町型の町割の南北二列の道と小路が一部残っているだけになりました。

幕末から明治にかけては、奥田楽淡や吉田寛治の開いた私塾や、林如醉、中根寅太郎などの寺子屋などがこの町にありました。

「間之町」という地名の意味ははっきりしませんが、①には「間」という文字には「あいだ」とか「しずか」とか「時間的にへだたる」「はなれる」などの意味があり、他の町より時代が遅くなって出来た意味から付いたという説、②には、「間」は「合」「相」の転化したもので「湿地」を意味することに由来しているという説で、確かに江戸時代にはこの付近が湿地だったのです。(文・松前俊洋さん)



「中間之町」を北から見る

※ 2月号の「地名をあるく」の本文に誤りがありました。お詫びして訂正します。

上段14行目 (誤)軍用→(正)軍事 上段29行目 (誤)億万田を→(正)億万田と 下段6行目 (誤)(一七五四)の→(正)(一七五四)銘の
下段12行目 (誤)います。→(正)いました。 下段16行目 (誤)借→(正)借